

サウンド・オブ・サンダー

2006(平成18)年3月26日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督・撮影監督＝ピーター・ハイアムズ／出演＝エドワード・バーンズ／キャサリン・マコーマック／ベン・キングズレー／ジェミマ・ルーパー／デビッド・オイエロウォ／ウィルフライド・ホッコルディンガー／コーリィ・ジョンソン（松竹配給／2005年アメリカ映画／102分）

……タイムスリップをネタとした映画は多いが、タイムトラベルを「商売」とした映画はまだ未開拓分野……？ 2055年には、リッチ層の憧れは超豪華客船での世界一周の旅行に代わって、タイムマシンによる「白亜紀ハンティング」になるかも……？ 『華氏四五一度』などのSF作家レイ・ブラッドベリの原作の映画化だが、タイムウェイブ（進化の波）による地球のそして人類の破滅を救うものは一体何……？ あまり真面目に考えても仕方ないと割り切って、想像上の物語と危機を乗り越えていく姿を楽しむことができればそれで十分なのだが……？

タイムスリップもの映画あれこれ

イギリス人作家H・G・ウェルズが1895（明治28）年に発表したSF小説『タイムマシン』は世界に大反響を呼んだもの。

そのタイトルをそのまま使ったタイムスリップもの映画が『タイムマシン』（02年）（『シネマルーム2』236頁参照）だが、タイムスリップをネタにした映画には、その他にも次のようにいろいろある。

- ①『タイムライン』（03年）（『シネマルーム4』79頁参照）は、1357年の百年戦争当時のフランスの村へタイムスリップするもの。
- ②『サマータイムマシン・ブルース』（05年）（『シネマルーム8』150頁参照）は、もっともお手軽（？）で、昨日と今日を何回もタイムトリップするもの。

③『戦国自衛隊1549』（05年）（『シネマルーム7』80頁参照）は、『タイムライン』と同じように1549年の戦国時代にタイムスリップするもの。

ところがこの映画は、タイムスリップの幅がケタ違いに大きく、何とタイムスリップするのは、6500万年前、つまり白亜紀へのハンティング・ツアーというわけだ。

2055年という近未来は？

最近、『中国は日本を併合する』（平松茂雄著・2006年・講談社インターナショナル）という物騒な（？）本が大ヒットしているが、変化が激しい今の社会状況では、今から10年後はある程度予測できても、50年後はとても予想することができない感じ。だからこそ、近未来の世界を描くSFモノがはやるわけだ。

ロボットの近未来を描いた映画、『アイ、ロボット（i,ROBOT）』（04年）などは、時期や程度の差はあっても、きっと近未来には実現している姿だろうが、タイムスリップ実現の可能性は、大きく意見が分かれるはず……？

「ロボット3原則」VS「タイムトラベル3原則」

『アイ、ロボット（i,ROBOT）』で、鬼の編集長ジョン・W・キャンベルが明文化し、アシモフ博士と一緒にまとめた「ロボット3原則」は、次のとおり。

第1条 ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第2条 ロボットは人間に与えられた命令に服従しなければならない。ただし、与えられた命令が第1条に反する場合は、この限りでない。

第3条 ロボットは、前掲第1条及び第2条に反する惧れのないかぎり、自己を守らなければならない。

これに対して6500万年前の白亜紀にタイムトラベルし、恐竜狩りを楽しむという、ハンティング・ツアーに参加するについての3原則は次の3つ。

その1 過去のいかなるものも変えてはならない。

その2 過去のいかなるものも置いてきてはならない。

その3 過去のいかなるものも持ち帰ってはならない。

これらはいずれも、今までのタイムトラベル映画でも注意されてきた内容だが、タイム・サファリ社が主催するハンティング・ツアーを行政から認可させ、顧客の人気を集めたのは、このような形で明確に3原則をまとめて、信頼を獲得したのが大きな原因……。ところが実際は……？

儲け主義の経営者 VS 研究に誠実な科学者

この映画では、冒頭のハンティング・ツアーの成功を受けて、タイム・サファリ社のチャールズ・ハットン社長（ベン・キングズレー）は、帰還してきた客を「時空の開拓者だ」と称えているが、これは99%営業政策で、次の顧客獲得のための宣伝要素が強いもの。

そのパーティーの席に飛び込んできた女性科学者のソニア・ランド博士（キャサリン・マコーマック）こそ、実はタイムマシンの頭脳である TAMI を開発した科学者だった。

ソニア博士は、ハットン社長が TAMI の権利を独占したことを怒るとともに、儲けのために再三ツアー客を6500万年前に送り込んでいけば、誤って過去に干渉する危険があることに警鐘を鳴らしていたわけだ。映画後半に至って明らかになるのは、ハットン社長はツアー観光客の「手荷物検査」に多額の費用がかかるため、何とこれを省略していたということ。

このような「手抜き」のため、帰還時の総重量が、ある事情によって、1.3グラムだけ増えていたことを見逃すことになり、それが人類滅亡という大きな危機を招くことになったのだが……？

トラヴィス博士は知力と行動力を兼備！

絶滅種動物の復元手段を研究しているトラヴィス・ライヤー博士（エドワード・バーンズ）は、あまり事情を知らないまま、研究に便利だからという理由でタイム・サファリ社に勤めていたが、傲慢なハットン社長の態度や、現実にはツアーで生じたちょっとした狂いを目の当たりにしたうえ、ソニア博士の話を書く中で、少しずつハンティング・ツアーの危険性を認識せざるをえなくなっていった。この映画ではトラヴィス博士が主人公だが、彼は科学者としての明晰な頭脳のみ

ならず、ハンティング・ツアーの引率力や異常気象発生→原因追及→適切なる対応策の模索という点における行動力も抜群！

これを観ているうちに、当初は「タイム・サファリ社の雇われ科学者」とバカにしていた(?) ソニア博士も、次第に彼と行動をとみにしていくことに……。本来ならば、地球と人類の滅亡の危機を救うために奮闘していく中、2人の間には愛が芽生え、無事解決した後、めでたく結ばれるというストーリーがあるはずだが、さて、この映画では……。？ しかし、こんな知力と行動力を兼備した科学者なんてホントにいるの……。？

脇役の扱いはちょっと雑……。？

白亜紀へのハンティング・ツアーで、トラヴィス博士をサポートしているのは、女性隊員のジェニー・クレイス（ジェミマ・ルーパー）や黒人男性のマーカス・ペイン（デビッド・オイェロウォ）たち。異常気象や街路樹の異常繁殖などの異常現象が突如発生したのは、ハンティング・ツアー客が過去から何かを持ち帰ったためだと推認しても、それをチェック・確認し、さらに過去に返すことは大変な作業。

また、その作業の間にも、1波、2波とタイム・ウェーブ（進化の波）が襲ってきたため、2055年のシカゴは巨大な昆虫や爬虫類と共存するケッタイな大都市と化していた。

この映画は、その原因究明と対策の探求に向けて行動するトラヴィス博士とソニア博士、そしてそれをサポートするジェニーとマーカスらの姿を描く冒険物語が大きなウエイトを占めているが、そこでちょっとかわいそうだと思うのが、ジェニーとマーカスの扱い方。

1人また1人と犠牲者が生まれることは避けられないことはわかるのだが、この映画での2人の役割を観ていると、まるで使い捨て……。？ これではちょっと雑すぎるのでは……。？

大きな話と小さな話……。？

この映画は、タイムスリップの規模も6500万年と大きければ、登場する動物た

ち(?)も恐竜をはじめとして巨大なものばかり。さらに、CG特撮とはいいながら、シカゴのまちを覆い尽くす波も巨大なもので、その波に呑みこまれた高層ビルや鉄道・道路のその後の姿は……?

他方、ネタばらしは禁物だから詳しいことは書けないが、地球の危機・人類の危機という大変な事態を招いたのは、タイムトラベルにおいて、誰かが故意か不注意かは別として「タイムトラベル3原則」を犯し、過去の何かを現在に持ち帰ったことが原因であることは明らか。しかし、6500万年前の白亜紀から持ち帰ったものとは一体ナニ……? そして、どうすればそれを元に戻すことができるのか……?

それがこの映画のキーポイントであり、サイエンスだが……?

こんなのが好きな人は是非どうぞ……

私は動物園での動物見学は、いつの頃からかしたことがないが、誰でも子供の手をひいての動物見学という楽しい体験はもっているはず。私は動物園特有のあの臭いは嫌いだし、たとえ動物園の中でもヘビの姿などは見たくないタイプ……。しかしその点、この映画を観れば、いろいろと楽しい(?)動物(?)の姿をスクリーン上で楽しむことができる。まずは、白亜紀に存在していた恐竜をハンティングするというスリルを楽しむことからスタートだが、この恐竜はわりと馴染みのある姿……。

他方、この映画が「創造」した未知のクリーチャーの第1は、リズブーン(トカゲヒビ)で、コモドオオトカゲとマンドリルを足して2で割ったようなイメージからそう名づけられたとのこと。

そして第2は、水で覆われてしまった地下鉄構内に突如出現し、トラヴィスを襲う巨大なウナギを思わせるクリーチャー。これは監督であるハイアムズの報道記者時代のゾツとした体験から創造されたとのこと。動物園めぐりやこんな動物(?)たちが好きな人には、この映画がおすすめだ。

2006(平成18)年3月27日記